

# 「ミゾゴイ」

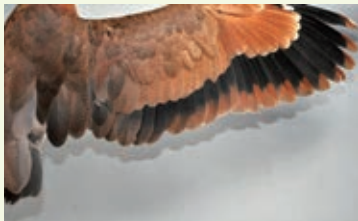
「ミゾゴイ」監修：日本動物科学研究所所長 今泉忠明

「ミゾゴイ」と聞いてすぐ頭に浮かぶ方は、決して多くないでしょう。サギ科の渡り鳥で一般的に知られているゴイサギに近く、漢字で書くと「溝五位」。溝にすむ五位ごいさぎ鷺のような鳥、という意味です。平安時代の書物でも確認でき、古くから日本に渡って来ていたことがうかがえます。

しかし、20世紀中ごろまでは多く見られたミゾゴイも、環境の変化などから激減。残存数は約1,000羽またはそれより若干多い程度と推測され、絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の可能性が増大している種）に指定されており知る人も少なくなっています。

ミゾゴイのイメージは「茶色の鳥」。頭は濃い赤褐色で身体の上は赤褐色、下はクリーム色で黒い縦縞が入っています。翼の端には黒い部分があり、広げると茶色に黒く縁どりしたような模様となって現れます。

雌雄の外見上の違いはほとんどなく、専門家であっても確実な判別は困難なようです。ヒナは白と黒のまだらですが、徐々に生えかわり、1年あまりで茶色の成鳥になっていきます。



▲翼を広げたミゾゴイ  
提供：横浜市繁殖センター

ミゾゴイは渡り鳥です。春から夏に日本の本州以南へ渡来し、丘陵地や標高1,000m以下の山地の広葉樹林で、巣作りと産卵、子育てを行います。日本へ到着すると、まずはつがいとなる相手を探します。オスは日暮れの後と夜明け前、高い木の枝先で「ポォー」と繰り返して低い鳴き声を上げ、メス呼びます。

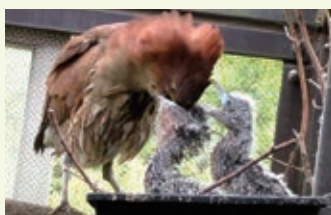
相手が決まれば、次は2羽で巣作りです。広葉樹の高い枝に小枝を重ね、2週間ほどで直径30~50cmの皿形の巣を作ります。メスはそこへ3~4個の卵を産み、約28日後の孵化まで交互に温めます。ヒナがかえっても、しばらく親鳥は交代で抱きかかえる



▲ミゾゴイの巣で親鳥を待つヒナ

よう温めながら育て、もう片方が食べ物を運びます。小さなヒナは食べ物を十分消化できないため、親鳥が一度飲み込み、消化したものをくちばしの中へ戻してわが子に与えるのです。孵化後35~39日で巣立ちを迎えますが、その後もしばらくは親鳥が食べ物を探してくるようです。

ミゾゴイの食べ物はミミズやサワガニ、貝類など、広葉樹の落ち葉を食料とする生き物です。発見するとミゾゴイは



▲ヒナに給餌をしているミゾゴイ  
提供：横浜市繁殖センター

鳴き声を  
聴くことができます。



忍び足で近づき、素早くくちばしでつまみとります。他のサギ類より短めのくちばしは、地面の生き物を捕らえるのに適した形状なのです。

ただ、現在は絶滅の危機を迎えています。広葉樹林の減少など原因はさまざまですが、自然環境の破壊によって数が減少している生き物は、ミゾゴイだけではないでしょう。自然界は一見豊かそうではありますが、そこにすむ生き物の生息環境を守るとは、私たちの未来を守ることにもつながっているのです。

近年、傷ついたミゾゴイを保護し、飼育する取り組みも始まりました。2015年には世界初の繁殖に成功するなど、ミゾゴイとのかかわりは着実に進んでいます。生き物を守っていく活動を通して、自然はすべての生き物のためにあるということに気付き、共存・共栄を考えるきっかけにもなるでしょう。

兵庫県民共済も「一人は万人のために 万人は一人のために」を理念として、自分のためだけではなく、誰かのために役立つ助けあいの保障ひとすじで、これからも歩んでまいります。ご自身のために、そしてあなたの大切な人や、あなたの大切な家を守るために、「生命共済」「傷害保障型共済」「新型火災共済」をぜひ考える機会にしてください。

## ちょこっと コラム 名前の由来は？

みぞごい  
溝五位の語源は、溝にすむ五位ごいさぎ鷺。では「五位」の語源はなんでしょう？

一説とされるものが「平家物語」に記されています。平安時代、ときの醍醐天皇が池のほとりにサギを見つけ、とらえるよう命じました。すると、サギは逃げもせず、仰せのままつかまったのです。天皇は「神妙であるなあ」と感心し、



五位の位を授けたのでした。五位のサギでゴイサギ。ミゾゴイは似ているというだけで「五位」の名をもらってしまった、というお話です。

▲名前のもとになったゴイサギ。ミゾゴイに似ていますね。